

### 三首の詠歌章（四帖第四通）

それ、秋も去り春も去りて、年月を送ること、昨日も過ぎ、  
今日も過ぐ、いつのまにかは年老のつもるらんとも、おぼえずしら  
ざりき、しかるにそのうちにはさりととも、あるいは花鳥風月のあそ  
びにもまじわりつらん、また、歡樂苦痛の悲喜にもあいはんべう  
つらんなれども、いまにそれともおもいだすこととは、ひとつもな  
し、ただいたずらに明かしく、いたずらに暮して、老の白髪となりは  
てぬる身の、ありさまこそかなしけれ、されども今日までは、無常  
のはげしき風にもさそわれずして、わが身ありがおの体をつらつら  
案ずるに、ただ夢のごとし、幻のごとし、いまにおいては、生死出離  
の一道ならずは、ねがうべきかたとは、ひとつもなくまたふたつもな

し、これによりて、ここに未来悪世のわれらごときの衆生を、たや  
すくたすけたまう阿弥陀如来の本願のましますときけば、まこと  
にたのもしくありがたくもおもいはんべるなり、この本願を、ただ  
一念無疑に至心帰命したてまつれば、わずらいもなくそのとき  
臨終せば、往生治定すべし、もしそのいのち延びなば、一期のあい  
だは、仏恩報謝のために念仏して、畢命を期とすべし、これすな  
わち平生業成のころなるべしと、たしかに聴聞せしむるあいだ、  
その決定の信心のおおりに、いまに耳の底に退転せしむることなし、  
ありがたしというも、なおおろかなるものなり、されば、弥陀如来  
他力本願のとうとさありがたさのあまり、かくのごとく口にかぶ  
にまかせて、このころを詠歌にいわく、

ひとたびも、ほとけをたのむ

こころこそ、まことののうに

かなう<sup>の</sup>みちなれ、

つみふかく・如来<sup>にょらい</sup>をたのむ

身<sup>み</sup>になれば、のうのちからに

西<sup>にし</sup>へこそゆけ、

法<sup>のう</sup>をまぐ・みちにこころの

さだまれば、南無阿弥陀仏<sup>なもあみだぶつ</sup>と

となえこそすれと、

わが身<sup>み</sup>ながらも本願<sup>ほんがん</sup>の一法<sup>いっぽう</sup>の殊勝<sup>しゅうしょう</sup>なるあまり・かく申しはんべり

ぬ、この三首<sup>さんしゅう</sup>の歌<sup>うた</sup>のこころは・はじめは一念<sup>いちねん</sup>歸命<sup>きめい</sup>の信心<sup>しんじん</sup>決定<sup>けつじょう</sup>のす

がたをよみはんべり、のちの歌<sup>うた</sup>は・入正定聚<sup>にゅうしょうじょうじゅう</sup>の益<sup>やく</sup>・必至<sup>ひっし</sup>滅度<sup>めつど</sup>のこ

ころをよみはんべりぬ、つぎのこころは・慶喜<sup>ぎょうぎ</sup>金剛<sup>こんごう</sup>の信心<sup>しんじん</sup>のうえに

は・知恩報徳のころをよみはんべうしなり、されば、他力の

信心発得せしむるうえなれば・せめてはかようにくちずさみても、

仏恩報尽のつとめにもやなりぬべきともおもい、また、きくひとも、

宿縁あらばなどやおなじころにならざらんとおもいはんべうしな

り、しかるに予すでに七旬のよわいにおよび、ことに愚闇無才の身

として、片腹いたくもかくのごとくしらぬえせ法門を申すこと、か

つは斟酌をもかえりみず、ただ本願のひとすじのとうとさばかりの

あまり、卑劣のこのことの葉を、筆にまかせて書きしるしおわりぬ、

のちにみん人そしりをなさざれ、これまことに讚仏乘の縁、

転法輪の因ともなりはんべうぬべし、あいかまえて、偏執をなすこ

と、ゆめゆめなかれ、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

時に文明年中丁酉暮冬仲旬のころ炉辺において暫時に  
これを書き記すものなりと云々

右この書は、当所はりの本原辺より九間在家へ仏照寺所  
用ありて出行のとき、路次にてこの書をひろいて当坊へもちき  
たれり

文明九年十二月二日

### 三首の詠歌章の大意

秋も去り春も去って年月を重ね、いつのまにか老いの身となって

しまいました。そのうちには風流な遊びをしたり、悲しいことや苦しいこともあったのでしようが、今はこれといって思い出すこともなく、ただむなしく暮らして老いてしまったのは悲しいことです。今日まで命があったのですが、それも夢まぼろしのようにであり、今とっては、生死の迷いから離れる道を求めることしか願うべきものはありません。

そこで、この私たちのようなものをお救いくださる阿弥陀如来の本願があると聞けば、まことにたのもしく思います。この本願に疑いなく、ただひたすら帰命すれば、そのとき命が終わっても、浄土往生は定まっているのです。もしその命がのびたなら、生涯、仏恩報謝の念仏をさせていただくのです。このことを平生業成という  
と聴聞しています。

この決定の信心は、今も耳の底に残り、なくなることはありません。ただありがたいというだけでは、いづくせないほどです。そこで、阿弥陀如来の本願のありがたさ、尊さが口をついて出るままに、三首の歌に詠みました。第一首は信心決定のすがたを、第二首は入正定聚・必至滅度の利益を、第三首は知恩報徳の思いを詠んだものです。

他力の信心を得たうえでは、このように歌を詠むことも仏恩を報じることになり、また、聞く人が如来のお育てをいただいでいれば、私と同じ気持ちであらうと思ったのです。しかし私も、はや六十歳を越え、愚かな身であることもかえりみず、教えられたままに法を説き、遠慮することもなく、ただ本願の尊さのあまり、つたない歌を筆にまかせて書きました。後にこの歌を見る人はどう

ぞろしらなうでくたさい。これは仏法をただえ、ひらめる縁ともなる  
ことぞしよう。どうぞかたよった考えには、決してとらわれないでくだ  
さい。